

---



---

## 研究報告

---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 3  
P.33-41 (2015)

# 基礎看護実習 I における指導方法の実態

～臨地実習指導者のフォーカスグループインタビューから～

## The Actual of the Teaching Method in the Basic Nursing Practice

- Interviews Focus Group with Clinical Training Instructors -

佐々木 史乃<sup>1)</sup> 石塚 淳子<sup>1)</sup> 藤尾 祐子<sup>1)</sup>

SASAKI Shino

ISHIZUKA Junko

FUJIO Yuko

濱口 真知子<sup>2)</sup> 野村 志保子<sup>3)</sup>

HAMAGUCHI Machiko

NOMURA Shihoko

### 要 旨

**目的：**本研究では、基礎看護実習 I における実習指導者の指導の実態を明らかにすることを目的とした。

**方法：**本学の基礎看護実習 I の実習を担当した経験のある実習指導者を対象とした。7名の対象者を3名と4名の2つのグループに分け60分程度のフォーカスグループインタビューを実施した。

**結果：**基礎看護実習 I における指導の実態として、【学生の特徴を捉える】、【その後の実習の導入として捉える】、【自分自身の指導の方向性や方法に悩む】、【スタッフや教員を巻き込んだ学びやすい環境をつくる】、【相互作用から得られる効果を実感する】の5つの大カテゴリーが導き出された。

**結論：**実習指導者は、初学者の学生を未熟であるが、一生懸命誠実に患者と向き合うありのままの姿を受け入れていた。また、学生の能力を信じ寛大で前向きな関わりの実態がみえてきた。これらのことから、看護学生にとって初めての实習をその後の実習の導入として捉え、看護の楽しさを教えること、支援型のかかわりを意識した指導の必要性が示唆された。今後は、意図的な指導を行うために教員と実習指導者が双方で作成する実習指導案と、指導についてリアルタイムに評価修正できるようなしくみが必要であると考えた。

**索引用語：**実習指導者、基礎看護実習 I、指導方法

**Key words：** Clinical training instructors, Basic nursing practice, Teaching method

---

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 順天堂大学医学部附属静岡病院

3) 順天堂大学保健看護学部 (韓国・建陽大学)

1) *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

2) *Juntendo University Shizuoka Hospital*

3) *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing (Konyang University)*

(Nov. 14, 2014 原稿受付) (Jan. 16, 2015 原稿受領)

### 1. はじめに

基礎看護実習 I は、看護学生の1年次に初めて入院生活を送っている患者を目の当たりにし、今まで学内で学んだ知識や技術を活かし、自分にできる身の回りのケアを考え実践する実習である。この実習での経験は大変貴重で学びが多く、今後の学習の動機づけにも影響を及ぼすとも言われている<sup>1)</sup>。このよ

うな実習で、学生の学びを支援する臨地実習指導者や教員は、短期間で実習目的や目標を達成させるために連携をとり、学生のレディネスを把握し、臨地実習でしか学べないことを精選し看護の喜びを実感できるような関わりが求められる。また、看護学生にとって臨地実習指導者との出会いや関係性は、看護師としてのロールモデルの構築にも影響を及ぼすこともあり<sup>2)</sup>、臨地実習指導者の責務は大きいといえる。文部科学省の「看護学教育の在り方に関する検討会」の報告書では、看護学の臨地実習指導教育の在り方と大学（学校）・施設双方の課題が述べられ、よりよい看護の臨地実習の体制を作っていくためには、双方の後輩育成に関する連携と目的意識の共有が重要であると強調されている<sup>3)</sup>。

順天堂大学保健看護学部は開学 5 年目を迎え、4 年間に必要な学習を終えた卒業生が初めて巣立ち、基礎看護実習 I は 5 回目となる。本学の基礎看護実習 I を受け入れている病院においても初めて看護系大学生の実習を受け入れるために、教員と臨地実習指導者と試行錯誤を重ねながら実習指導を行ってきた経緯がある。これまでの基礎看護実習 I を振り返ると、評価会議や実際の指導場面において、臨地実習指導者の実直な実習指導に対する思いや考え、悩みや問題など、実際の指導場面から指導方法について共に考える機会がなかった。ここで、研究代表者自身が、初期の学習段階での実習指導の重要性を改めて感じ、再考する時期にあると考えた。

現状の実習指導体制は、実習指導案は、教員が中心となり組み立てており、臨地実習指導者の意見や考えを反映し連携できているとは言い難く、また、学生のレディネスに合わせた適切な実習指導が十分に浸透していない。

そこで、基礎看護実習の実習指導に関する先行研究をみると、教員の指導過程の振り返りや実習後の学生からのアンケート調査などが多く<sup>4)5)</sup>、臨地実習

指導者の具体的な指導場面を詳細に導き出し、実習指導の方法や在り方を検討しているものは見当たらない。さらに、教員と臨地実習指導者の連携に関する研究では、意識調査や役割分担に関するアンケート調査が多く見受けられるが<sup>6)</sup>、実際の指導から指導方法や在り方を検討している文献は少ない現状である。以上のことから、本研究では、基礎看護実習 I において臨地実習指導者は看護学生とどのように関わり、どのような指導を行っているのかを明らかにし、今後の実習指導の充実を図るための基礎的資料とする。

## II. 目的

本研究の目的は、看護学生にとって初めての臨地実習における適切な指導の在り方や指導方法を検討するために基礎看護実習 I における臨地実習指導者の指導の実態を明らかにすることである。

本研究結果により、学生に対する初期の学習段階での実習指導の示唆を得ることができ、質の高い臨地実習指導者の育成に繋がるのではないかと考える。さらに臨地実習指導者と教員が連携できる実習指導体制作りへの貢献が期待できる。

## III. 順天堂大学保健看護学部における基礎看護実習 I の概要

1. 時期：1 年次後期（2 月）
2. 単位数：1 単位（45 時間）
3. 実習目的：入院生活を送っている患者の生活援助の体験を通して、個々の患者の健康・生活状況にあった看護を行う重要性および看護職者に求められる倫理的姿勢を学ぶ。
4. 実習場所および学生数：某大学病院 学生 123 名
5. 実習指導体制：1 病棟に学生 5～7 名を配置し、臨地実習指導者 1 名、教員 1 名が担当する。（基礎

看護学教員のみ2病棟担当)

## 6. 実習方法

日常生活行動の援助が必要な成人期または老年期の患者1名を受け持つ。

4日間の病棟実習と1日間の実習振り返りと実習のまとめの発表会を行う。

## IV. 方法

- 1) 研究デザイン：質的帰納的デザイン
- 2) 調査期間：平成26年2月 基礎看護実習Ⅰの評価会議が終了した後1週間以内
- 3) 調査回数と時間：2グループに1回ずつフォーカスグループインタビューを60～90分間実施する。
- 4) 調査場所：研究協力の得られた施設のカンファレンス室などの個室
- 5) 対象：以下(1)(2)両方の条件を満たす臨地実習指導者
  - (1) 本学の基礎看護実習Ⅰを担当し、研究参加の同意が得られた者。
  - (2) 総合実習または成人・高齢者実習などの領域実習を担当した経験のある者。
- 6) 調査内容
  - (1) 対象者の属性や背景  
(看護師経験年数、職位、指導経験、実習指導者になった経緯等)
  - (2) 実習指導の実際(他領域の実習指導と比較できるようにインタビューを行う)
    - ・実習を受け入れるために準備していること
    - ・基礎看護実習Ⅰの指導で特に意識していること  
指導上の工夫、重点的に指導していること、学生との関わり
    - ・基礎看護実習Ⅰの実習指導に伴う悩みや問題、不安なこと
    - ・基礎看護実習Ⅰの実習指導に伴う楽しみややりがい

・様々な出来事に対してどのように対処したのか等

## 7) データ収集方法：

- ・フォーカスグループインタビュー(参加者の許可を得てメモと録音により記録)
- ・1グループ5～6名、ファシリテーター1名(研究グループメンバー)

ファシリテーターの役割として、話し手の順序や非言語的行動、雰囲気など可能な限り記録すること。実習指導での体験を、ありのまま話してもらえよう雰囲気作りを徹底すること。対象者の発言に対し、コメントや意見はしない。という研究メンバー間の共通認識の基に進めた。

## 8) データ分析方法：

フォーカスグループインタビューで得られた内容(録音テープ、メモ)から作成した逐語録を繰り返し読み、文章の意味が読みとれる最小の段落に分け、分析の単位とした。さらに、基礎看護実習Ⅰでの指導の実際に焦点をあて、コード化し、コードの共通性を見出す中でカテゴリーを抽出し、抽象度を上げた。カテゴリーの抽出は、データ、コードに戻りながらカテゴリーの特徴、命名の検討を重ね、その際、看護教育および質的研究に精通している2名の専門家からのスーパーバイズを受け妥当性を高めた。カテゴリーの類似性、相違性を比較しながらカテゴリー間の関係性を探索し、これを行きつ戻りつしながら進め、最終的なカテゴリーの抽出段階でカテゴリーを導き出した。

## V. 倫理的配慮

本研究は、順天堂大学保健看護学部研究等倫理委員会の承認を得て実施した。研究対象者には、研究の目的・意義・方法・人権の擁護、データ保管・処理方法を文書及び口頭で説明をした。研究の同意については、本人の自由意思であり、研究協力の撤回や中断

をした場合でも、病院側に知られることは一切なく、臨地実習指導者としての資質や能力評価、教員との関係性において全く影響がないことを保証した。本研究の成果は、看護関連学会に発表する予定等について、文書および口頭にて説明し同意を得て実施した。

## VI. 結果

### 1. 対象者の背景

対象者は、20～30歳代の男性1名、女性6名の計7名であった。計7名の対象者を無作為に3名と4名の2グループに分けた。職位は、主任3名、スタッフ4名であり、看護基礎教育の学歴は、短期大学1名、専門学校5名、専攻科1名であった。また、臨地実習指導者としての経験は、1年～12年と幅があり、臨地実習指導者になった経緯は、上司からの指名が7名全員であり、指名の理由が、看護師としての経験年数、研修会の参加歴、新人指導などの経験から選出されていた。インタビューの時間は、3名グループが1時間06分、4名グループが1時間20分であった。

### 2. 基礎看護実習 I における指導方法の実態 (表 1)

3名と4名の2グループが語った基礎看護実習 I における指導の実際をデータ化し分析した。大カテゴリーを【 】, 中カテゴリーを『 』, 小カテゴリーを「 」で表し、カテゴリーごとに説明する。一部の大カテゴリーの代表的な語りの具体例を太字で示す。

#### 1) 【学生の特徴を捉える】

臨地実習指導者は、学生とのかかわりの中で、「言葉のボキャブラリーが減っている」と、『語彙や発想の乏しさを実感する』が、「実習期間中はベッドサイドで患者のそばにいる時間が長い」ことから、『患者と一生懸命忠実に向き合う姿をみる』場面に数多く遭遇し、4日間の病棟実習の中で、「日に日に学生の表情が違い素直でいい」という、『ピュアで素直な学

生の成長を実感する』経験をしていた。

・学生 *の* 気持ちの変化とかを見てると、*すごい純粋で、何か忘れてるものをまた思い出させてくれたりとかは、何かやっぱり4日間しかないけど、4日間の中で患者さんの変化、ちょっとした表情の変化とかもすごい見てて、初日よりしゃべれたりとか言葉が増えたりとか、そういうのもすごいやっぱ素直に吸収してるんですよね。* (4名グループの語り)

#### 2) 【その後の実習の導入として捉える】

臨地実習指導者は、初めて看護援助場面に触れる学生であることを意識し、『実習が楽しいと思ってほしい』という思いの中、「一緒にケアをしながらアドバイスをする」等、『とにかく一緒にベッドサイドに行きケアの見本を見せる』指導を行っていた。実際の指導場面では、学生に、「何か気付いた?」、「振り返ってみよう」と『学生の気付きを引き出す』指導や、『ほめることを優先する』、『学生のやりたいことを尊重する』こと、実習目的を達成するために、「学生の自信がつくまで根気よく指導する」という『一人ひとりをよくみる』ことを意識して指導にあたり、臨地実習指導者の考えを押しつけることなく、『基礎の段階では多くを求めない』ことにも配慮し、基礎看護実習 I での4日間という短い期間で学びを引き出すようなかわりを行っていた。しかし、学生からの学びを引き出すためには、『意図的に患者を選択する』ことが必要で、「4日間でもコミュニケーションがとれそうな患者を選定する」という具体的な内容が語られた。また、看護場面の現象を的確に捉えてもらうために『言葉や行動の意図まで教える必要がある』ことも意識していた。さらに、「カンファレンスでは体験したことの意味を考えられるようみんなに投げかける」、「基礎の段階から時間管理を意識させる」というチームの一員であることを初期の学習段階から意識させるような働きかけもおこなっていた。

・1個は絶対にほめるコメントを入れるっていう

表1 基礎看護実習Iにおける指導方法の実態

大カテゴリー	中カテゴリー	代表的な小カテゴリー
学生の特徴を捉える	語彙や発想の乏しさを実感する	言葉のボキャブラリーが減っている 経験が浅いから発想は乏しい
	患者と一生懸命忠実に向き合う姿をみる	実習期間中はベッドサイドで患者のそばにいる時間が長い スタッフや患者のことをよく見ている
	ピュアで素直な学生の成長を実感する	患者の表情の変化を素直に吸収している 日に日に学生の表情が違い素直でいい ピュアでまっさらな学生がいい 素直な反応をそのまま言葉にする
その後の実習の導入として捉える	実習が楽しいと思してほしい	指導者が楽しんでいると学生も楽しそう 実習が楽しいと思してほしい
	とにかく一緒にベッドサイドに行きケアの見本をみせる	一緒にケアをしながらアドバイスをする 自分の技術を見せながらの指導をする とにかくベッドサイドに行ってみせる
	学生の気付きを引き出す	「何かきづいた？」と聞く 「振り返ってみよう」と、最初から順序立てて話す
	ほめることを優先する	学生の振り返りに対して褒める 1つの気づきを100点かのように褒める
	学生のやりたいことを尊重する	学生がやりたいことをやらせる 患者の受け持ちの継続を本人に決めてもらうようにした
	一人ひとりをよくみる	疑問はその場で解決できるようにする 学生から直接振り返りを聞く 学生の自信がつくまで根気よく指導する
	基礎の段階では多くを求めない	100は求めない 多くを求めていない
	意図的に患者を選定する	4日間でコミュニケーションがとれそうな患者を選定する 指導者がケアをしたいと思う患者を選定する 学生と一緒にケアが出来る患者を選定する
	言葉や行動の意図まで教える必要がある	シャドウイングは見せているだけになる 患者の言葉の裏まで教える必要がある
	グループで学びあうことの大切さを教える	コメントやできていないことは全体に向けて話す 考えつくまでグループで考えさせる
	時間管理の大切さを教える	カンファレンスでは体験したことの意味を考えられるようみんなに投げかける 基礎の段階から時間管理を意識させる 時間をみながら動くことを覚えてほしい
	自分自身の指導の方向性や方法に悩む	伝えたいことが伝わらないもどかしさを感じる
指導のみちしるべがない		手探りの指導では実習を楽しめない 自分の指導に気づかない 学生に援助計画を継続させるような働きかけができない 立案した指導案を広げたい
教員や指導者同士が気軽に話せる場がない		意見交換の場は気軽に話せない その日の実習について教員と話せる時間がほしい 指導経験が浅いと先輩や主任クラスの指導者とはなかなか話せない
実習目的を理解していないスタッフとの関わりに悩む		学生に100を求めるスタッフがいる スタッフが学生にどこまで求めたのかを確認するのが困る スタッフが学生の見本になっているか不安
スタッフからの協力を得る準備をする		細かく教えてほしいことを申し送りノートに書く 実習の目的・指導のポイントをスタッフへ渡す スタッフは上手な噛み砕き方ができる
スタッフや教員を巻き込んだ学びやすい環境をつくる	スタッフの力量を見極めながら指導の助けを借りる	スタッフと患者と学生がケアしていると会話がはずむ 年代の近いスタッフからの指導は受け入れやすい スタッフが行っているケア場面に学生を入れる スタッフが学生の見本になっている スタッフの力量を把握して指導をお願いする
	指導の成果をスタッフへフィードバックする	業務に余裕のありそうなスタッフに指導をお願いする 実習の成果をみてスタッフがそれぞれに何かを感じてもらいたい いいことはスタッフへフィードバックする
	話しかけやすい雰囲気をつくる	怒りの雰囲気は出さず柔らかい雰囲気を出す 積極的に話しかける
	学生の学習状況に応じて役割を分担する	ケアに入ったスタッフや教員に話を聞く 教員とコメントが重複しないように配慮する
相互作用から得られる効果を実感する	初心に戻り自分自身を振り返る機会になる	話していると発見があり自分を振り返ることができる 自分のためになるから指導を続けたい 学生の気持ちの変化は純粋で初心に戻る
	指導者しか味わえないの喜びを実感する	ケアの効果を学生と一緒に感じる 学生の指導を教員と話そうになってから楽しいと思えた
	病棟の看護の質を高める	学生が計画した援助を継続させるようにスタッフに働きかける 良いケアはスタッフも継続してくれる 率直な学生の意見を受け止めスタッフの意識を変える

のが自分の中であって、あとは、指導が必要なことっていうのは随時言ってるから、記録にまであんまり残さないです。ちょっとこれ要るなっていうときは、たまに書きますけど、もう記録のコメントはほめて終わるっていうふうに一応やっています。残るからやっぱり、それでほめてもらって楽しかった実習だなんて、思うんで、記録は、なるべくほめるコメントで終わりたいなっていう雰囲気です。（3名グループの語り）

・ケアが1個できたら、「どうだった？」って聞くと反省しか上がってこなくて、できなかった、あれもだめだったとかになるから、「何か気づいた？」って聞くように、ついちょっと後輩への癖で、「どうだった」って聞きがちなんですけど、「何か気づいた」っていうように基礎1はなるべくしてて。そしたら、いや、この人の爪が伸びてる、足浴したら爪が伸びてるっていうのに気づきましたとか、何か1個気づきが出てきたら、そこをもう本当100点かのようにほめるっていう、そんな感じで。（4名グループの語り）

### 3) 【自分自身の指導の方向性や方法に悩む】

臨地実習指導者は、「学生の言葉がわからない」、「伝えたいことが伝わらない」という『伝えたいことが伝わらないもどかしさを感じる』体験を語った。また、「学生に100を求めるスタッフ」がいることで、『実習目的を理解していないスタッフとの関わりに悩む』様子も語られた。初学者を指導する上での様々な悩みや問題を抱えている臨地実習指導者は、「その日の実習について教員と話せる時間がほしい」と、その時、その場でおこる問題に対して解決に導く術を求めていた。また、「学生の実習計画を継続させるように働きかけることができない」、「指導案を作る時間もなくて、作るのに時間がかかる」と、指導案の必要性を認識しているものの、指導案を作成する上での悩みも抱えていた。看護の初学者にかかわる臨地実習指導者にとって、『指導の道しるべがない』ことは、【自

分自身の指導の方向性や方法に悩む】ことの具体的な内容として語られた。

・初学者にどう気づかせていくかで、私もいつも悩むところ、そういう視点がないから、そのまま通り過ぎちゃう。でも、そこに気づいてほしいというこちら側の意図がある程度ある。そうしたときに、どうやってみな気づかせているんだろうという、気づかせるような働きかけしているんだろうというのは、いつも興味がある。（4名グループの語り）

・研修会でも頑張ってるやってきたんだけどな（指導案の作成）。時間を理由にしちゃいけないと思いつつも、どこの時間を使ったらつくれるんだろうって、いつも考えて。今、一からつくろうと思うとすごい時間かかっちゃうけど、基本的なところは変わらなくて、こことこことこだけちょっとアレンジしてみない、今回とか、そんな感じで使っていけば、本当1時間ぐらいの話合いとかできたりとか思うので、一からじゃ、あんなのやっていたら、本当に。（3名グループの語り）

### 4) 【スタッフや教員を巻き込んだ学びやすい環境をつくる】

臨地実習指導者は、スタッフと学生とのかかわりから、「年代の近いスタッフからの指導は受け入れやすい」ことを目の当たりにし、「スタッフがやっているケア場面に学生を入れる」等、『スタッフの力量を見極めながら指導の助けを借りる』意図的な働きかけをしていた。そのとき、スタッフへの負担軽減と学生の学びを考慮して、「細かく教えてほしいことを申し送りノートに書く」等、『スタッフからの協力を得る準備をする』努力をしていた。また、スタッフの指導に対するモチベーションを維持するために『指導の成果をスタッフにフィードバックする』ことにも配慮していた。

・若いスタッフに（指導の）依頼をするときに、ここまでではできないからここまでではやらせてほしいって、

だから、それ以外のところをやってっていうふうに、ちょっとラインを引いてるかなって、今思ったんです。(4名グループの語り)

##### 5) 【相互作用から得られる効果を実感する】

臨地実習指導者は、初学者の学生とかかわる中で、「ケアの効果を学生と一緒に感じる」場面に数多く遭遇し、『指導者しか味わえない喜びを実感する』経験を語った。そして、「学生の気持ちの変化は純粋で初心に戻れる」という『初心に戻り自分自身を振り返る機会になる』と臨地実習指導者自身の自己研鑽の機会となっていた。さらに、学生の「よいケアはスタッフも継続してくれる」等、『病棟の看護の質を高める』【相互作用から得られる効果を実感する】具体的な内容も語られた。

・自分の発見が、今も話すだけでも、ああそうとかか発見あるし、単純に初心に戻れるというのものもあるし、看護とか聞いていても、何かおもしろいですよね。そんなふうに観察できるんだとか、本当。ただ、自分のためにもきつとなっていると思います。答えがまだ出てないところもいっぱいあるんですけどね。だから、もっとやりたいなと思うんですね。(3名グループの語り)

## VII. 考 察

本研究では、基礎看護実習Ⅰにおける指導方法の実態として、【学生の特徴を捉える】、【その後の実習の導入として捉える】、【自分自身の指導の方向性や方法に悩む】、【スタッフや教員を巻き込んだ学びやすい環境をつくる】、【相互作用から得られる効果を実感する】の5つの大カテゴリーが導き出された。これらの結果から、重要と考えられる2つの視点で考察した。

### 1. 支援型のかかわり

基礎看護実習Ⅰを担当した臨地実習指導者は、初学者の学生を看護職者としては未熟であるが、一生懸命誠実に患者と向き合うありのままを受け入れ、学

生の能力を信じ寛大で前向きな関わりをしている指導の実態がみえてきた。看護学生にとって初めての实習であることを意識し、“看護の楽しさを味わってほしい”という臨地実習指導者の思いと、今後の学習につながるような“指導スキル”を駆使していた。花田は、教育の方法について、指導型と支援型を示している。支援型の教育の本質は、一人ひとりの成長を個人の視点に立って助けるものであり、指導するほうの意思に沿ったものではない。本来個人が持っている力をいかに引き出すことができ、自己教育力を育むものであると述べている<sup>7)</sup>。本研究の結果から導き出された『学生の気付きを引き出す』、『褒めることを優先する』、『学生のやりたいことを尊重』するという具体的な指導は、臨地実習指導者の意見や考えを押しつけるのではなく、学生のピュアで純粋な気付きや考えを引き出すものであった。これは、花田のいう支援型のかかわりであると考えられる。また、臨地実習指導者は、とにかく一緒にベッドサイドに行きケアの見本を見せることを最優先し、実習の楽しさを実感してもらえようような指導を行っていた。水戸は、「学生のもつ最初の看護への関心を大切にし、その関心に関連する看護事象の本質とリアリティを示すことでより強い関心、動機付けになって、自らそのことを探究しようとするまでに働きかけることが大切である。」<sup>8)</sup>と、述べている。このことから、一人の患者を受持ち、直接的なケアを行う場面に数多く遭遇した学生は、臨地実習指導者の支援型のかかわりによって、看護への関心が高まり、看護職としての第一歩を踏み出すことができると考える。基礎看護実習Ⅰでは、より多くの看護場面に学生を遭遇させ、“支援型のかかわり”の中から“看護の楽しさ”を伝えられるように働きかけることの重要性が示唆された。

### 2. 手探りでの実習指導

初めて看護実践の場に触れる看護学生を指導する

臨地実習指導者は、自分の指導の方向性や方法に悩みながら手探りで学生とかかわっていることがわかった。基礎看護実習 I は、4 日間という短い期間で、実習目標を達成に導かなければならないこと、何もできない状態の学生にどのように指導していいのかわからない等の具体的な悩みは、実習指導を行うための指導案が作成されていないことや、作成した指導案を上手に活用できていないこと、教員とじっくり話す機会がないことから発生していることがわかった。実習指導案は、今ここで行う実習の意義、この実習で学習できること、学生の特性・実態や傾向も含め、一連のプロセスをもって、意図的にかかわりを可能にするために作成するものである<sup>9)</sup>。先にも述べたが、基礎看護実習 I を担当する臨地実習指導者の責務は極めて大きい。現状のような手探り状態での指導は、臨地実習指導者の負担は増大するばかりである。初めての実習の前に学習される知識としての“看護師像”や“患者像”は、初回の実習において描き直され、捉え直されるといふ<sup>10)</sup>。まっさらで純粋な学生たちにとって、自分自身の言動や行動そのものが、看護学生への影響要因となりうる。だからこそ基礎看護実習 I では、より意図的な指導が求められ実習指導案の作成・活用は必須であると考えられる。多忙な日常業務に追われがちだが、作成や活用できない現状を受け止めながらも、実習指導に携わる臨地実習指導者や教員の責務を念頭に置き、意図的で効果的な指導ができるように双方が努力しなくてはならない。今後は、臨地実習指導者と教員が連携をとりながら、実習指導案を作成し、リアルタイムに悩みや問題を解決できるような場や指導案を活用できるシステムの構築が必要であると考えられる。

## VIII. 結 論

1. 基礎看護実習 I における実習指導の方法の実態として、【学生の特徴を捉える】、【その後の実習の導

入として捉える】、【自分自身の指導の方向性や方法に悩む】、【スタッフや教員を巻き込んだ学びやすい環境をつくる】、【相互作用から得られる効果を実感する】の 5 つの大カテゴリーが導き出された。

2. 臨地実習指導者は、看護学生にとって初めての実習をその後の実習の導入として捉え、看護の楽しさを教えること、支援型のかかわりを意識した指導を行っていた。
3. 短期間で意図的な指導を行うために、教員と臨地実習指導者が共有できるような実習指導案の作成・活用方法の検討が必要である。また、実習指導案を取り囲みながらリアルタイムに、指導の相談や振り返りができるしくみを構築していく必要性が課題として残された。

## 謝 辞

本研究にご協力くださいました臨地実習指導者の皆様に感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成 25 年度順天堂大学保健看護学部共同研究助成を受けて行った。

## 引用文献

- 1) 西谷美幸：基礎看護実習における理論と実践の統合に対する教育，保健科学研究誌，1，87 - 95，2004.
- 2) 洲野由夏，加藤法子，中野榮子 他：基礎看護実習 I の実習前後における看護師イメージ変化の比較検討，福岡県立看護学研究紀要，5（2）89 - 96，2008.3.
- 3) 看護基礎教育の充実に関する検討会ワーキンググループ，厚生労働省看護学教育の在り方に関する検討会報告書，2002.  
(<http://www.umin.ne.jp/kango/kyouiku/report.pdf>、閲覧日：2014 年 12 月 1 日) .
- 4) 石本陽子：基礎看護実習における実習指導の振り

- 返り, インターナショナル Nursing Care Research9 (2), 155 - 164, 2010.5.
- 5) 徳永基与子, 三瓶眞貴子, 山田秀樹: 基礎看護実習における臨地実習指導のあり方 基礎看護実習での指導過程を分析して, 京都市立看護短期大学紀要 34, 65 - 74, 2009.7.
- 6) 椎葉美代子, 齋藤ひさ子, 福澤雪子: 看護学実習における実習指導と教員の協働に影響する要因, 産業医科大学雑誌, 32 (2) 161 - 176, 2010.
- 7) 花田光世: 自己教育力を育てる, 看護教育, Vol. 59 No.4 074 - 080, 2007.
- 8) 水戸優子, 加納佳代子: 「基礎看護学」において初めて看護に接する学生につたえることは?, 看護教育, Vol54 No.2, 76 - 82, 2013.
- 9) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子: 看護教育における授業設計, 第3版第1刷, 医学書院, 東京, 96 - 97, 2006.
- 10) 和賀徳子, 高口みさき, 島田千恵子: 看護学教育の初回臨地実習における学生の学びの構造 - 初回臨地実習の質的研究のメタ統合を通して -, 日本看護学教育学会誌, 20 (1), 37 - 47, 2010.